



ワイキキプレミアム会場。潮騒つきの超立体音響。日没封切りなのに、すでにこんなに入場者が

LEADING EDGE

“Life 天国で君に逢えたら”は、クライマックスではなく、始まり。

photos by KazTanabe
text by TOKO



寛子さんはこのステージで、「執筆による再生」の象徴的遺品・万年筆を、大沢たかお氏に贈った

もう21年も前のことになる。
映画では「藤堂」として描かれた、故・石渡常原氏は沖縄で、琉球大在学中の飯島夏樹を発見し、ものになりそうなやつがいるから鍛えてやってくれ、と「中央」に紹介した。
中央とは、葉山に拠点を置くチームウインドサーファーである。チームには、新嶋光晴、岩橋厚、佐藤務（ウインドサーフィンが正式種目となった84ロス五輪日本代表）ら錚々たるメンバーがいた。彼らは、日本のプロウインドサーフィンの黎明期から、そのパフォーマンスとビジネスモデルを構築してきた、文字通りのパイオニアだった。彼らは夏樹をトレーニングし、スポンサーに紹介し、海外遠征に連れて行き、世に出した。とりわけ新嶋氏は、寛子さんのなれそめを知り、その結婚披露パーティの司会も務め、夏樹の、公私にわたる兄貴だった。氏は現在48歳、材木座セブンシーズのオーナーであり、日本ウインドサーフィン界のリーダーの一人である。この夏、新嶋氏は、日本ウインドサーフィン界は、天国の夏樹から、おおきな贈り物をもたらした。

8月25日に封切られた映画は、10月初旬時点で125万人を動員し、16.4億の興行収入をあげた。8月29日には、ワイキキのサンセットオンザビーチでプレミア試写会が行われた。このイベント、開催決定が遅れたため、充分な告知ができなかった。2日前に少数の告知ポスター、それとローカルFM局によるアナウンス程度だった。加えて、通常は週末なのに、水曜の開催。さらに、ハリウッド映画ではなく、初めての日本映画。寛子さん、日本からかけつけた大沢たかお氏は、数十人しか集まらなかつたらどうしようと、本気で心配したらしい。けれど、その黄昏、じつに6500もの人が殺到したのである。そんな数字以上に、夏樹の映画には、なんとというべきか、ヴァイブレーションがある。一人で7回観た。夫婦で観にゆき、20年ぶりに手をつないで帰った。映画を観て、自殺をおもいとどまった。関連ブログはそんな書き込みで埋まった。「Life 天国で」は、生き抜くことや、家族を愛することを、臆面もなくと形容していいほど、ストレートに描いた作品である。そういう、ど真ん中の直球が、人々のこころの芯を打った、ということであろう。

そう、ウインドサーフィンである。映画は、夏樹が望んだとおり、ウインドサーフィンをかっよく というかありのままに 描いた。ロードショー以降、どこのウインドサーフィンスクールも受講者が激増した。地方では前年比15倍とか、閉めていたスクールを、受講者の希望によって再開した例もある。新嶋氏のセブンシーズも、9月は前年比200%だった

という。スクール受講者の定着率(かれらが道具を揃え、いっぱいウインドサーファーになる率)は、残念ながら10-15%と低い。が、それも改善されるかも知れない。映画と、その各メディアでの露出、桑田佳祐の主題歌などによって、ウインドサーフィンが 新嶋氏の言葉を借りれば 世に「公認」されたからである。新嶋氏はこれまで、さんざんウインドサーフィンを語ってきた。「風にも、波にも乗れ、毎秒3メートルの微風でも、うまくなれば台風の海でも遊べる、オンリーワンの、究極のネイチャースポーツで……」ウインドサーフィン? 見たことはあるけどねえ、ヨットの、サーフィンの亜流でしょ。言葉は、届かなかった。

状況は変わった。彼らはいまやこう応えるのだ。知ってるよお、「あの」ウインドサーフィンでしょ、やりたいと思ってたんだ。彼らはウインドサーフィンを理解している。夏樹がその生涯をかけて綴った「物語り」とともに。

前号の、このページにも書いた。ウインドサーフィンは新たな局面に入った、と。じつは、その胎動は、「映画」以前から始まっていた。キッズスクーリングの盛況である。日本風波アソシエーション主催の、ポケモン・キッズレッスンは定員60名で3回開催されたがいずれも満員。セブンシーズ主催のロッチマリン学校、同じく定員60名・4回開催だったが、キャンセル待ちもでる盛況だった。ピギナーだけではない。鎌倉ジュニア

WSFチームは、小一から中三までの有望選手25名を擁している。それは、彼らの親が、ウインドサーフィンを認め、勤めているということだ。その親たちも子どもたちに負けていない。80年代に20代でウインドしていた人が再開している。さらに、新嶋氏が確実視しているのが、昨今のブームでロングボードサーフィンを始めたオヤジ層からの転向組だ。サーフィンは狭いエリアで波を取り合う。これがピギナーには難しい。なに前乗りしてんだよ、と若いのに怒鳴られたり、50肩でパドルできないとかで、続かない。買ったウエットを無駄にしたくないし、今回の映画で、そうだ、ウインド、となるわけである。「ちょいワル」なら、天君効果で女の子にもモテるかも、と下心も手伝うかも知れない。「そりゃアマいんじゃねえか」と、夏樹は苦笑しているだろうけど。

"Life 天国で君に逢えたら" は、クライマックスではない。始まりなのだ。

セブンシーズのロッチマリン学校。4回開催されたが全て満員。子どもたちで埋まった。



©TAKI